九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Winesburg, Ohio における詩人のまなざし

江口, 浩一
九州大学大学院人文科学府 : 修士課程

https://doi.org/10.15017/6790324

出版情報：九大英文学. 47, pp.95-115, 2004. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

*Winesburg, Ohio*における詩人のまなざし

江口浩一

序

1919年に発表された「ワインズバーグ、オハイオ」は、社会から隔絶され、孤独の中で呻吟する人々を描いている。彼ら"grotesque"[1]の人々は皆奇妙に歪んでおり、その人生は悲哀に満ち、どこか滑稽でさえある。そんな人生の一幕を描く各短編において作者Sherwood Andersonが試みていることは、彼らに「表現する」機会を与えるというものである。だがそれらは多くの場合、感情の激発、時として異常行動という形で発現し、結末に至っても救いが示されていない。つまり彼らの姿はある種の心理学的「症例」と言った様相を呈しているのであり、それゆえ多くの批評が、彼らを抑圧し、孤独な状態に至らしめた社会の有り様、あるいは異常心理そのものに着目し、論じてきた。

だが、アンダーソン自身は、彼らの奇妙な性質の根本に「何か美しい素質」があると明言しており、それを描き出すことを「詩人の仕事」"a job for a poet"(10)と表現している。彼の作品、および手紙の中で幾度か用いられているこの「詩人」という概念は、彼の作家業におけるモチベーションの根幹を成すイメージであると考えられる。アンダーソンはこの「詩人」の名の下に、「ワインズバーグ」を描いているわけであるが、彼自身の経歴を重ね合わせて見たとき、「グロテスク」の人々に対する肯定の意思が、きわめて自己弁護的であるという印象を受ける。つまりアンダーソンは「ワインズバーグ、オハイオ」を書き、自らの人生を肯定する、あるいは弁護する強い欲求があったのではないか。

そこで本稿で考察するのは次の二点である。アンダーソンが「詩人」の名の下に、架空の町「ワインズバーグ」として再構成した、作者個人の人生観。そして、「グロテスク」というきわめて特異な存在に写し出された、社会の「主流」と「異端」の構図。これらを議論することにより、社会という単位の中で個人が置かれた立場を浮き彫りにし、その中で飽くまで主体的に人生を構築しようとする「グロテスク」たちの姿を眺めていく。

I

「ワインズバーグ、オハイオ」において初めて"poet"という語が登場するのは"Hands"である。この「手」という短編は、序文にあたる"The Book of the Grotesque"を除けば「ワインズバーグ」作品群の最初の短編であり、これらを読み解くキーワードの一つである「詩人」についての言及が多くなされているという点で、物語への導入的な色合いの濃いグロテスク・ストーリーであると言える。では問題の箇所を引用してみる。

> The story of Wing Biddlebaum's hands is worth a book in itself. Sympathetically set forth it would tap many strange, beautiful qualities in obscure men. It is a job for a poet. (10)

ここでは本稿の序でも触れた、「詩人の仕事」について述べられている。すなわち、「詩人」と呼ばれるひとの手によって語られたとき、ビドルボームの「手」にまつわる物語は、より大きな視座を得るための立脚点となりうると言うものである。そして、語り手はビドルボームの秘されていた過去を明かすにあたっても次のような前置きをしている。

> Perhaps our talking of them will arouse the poet who will tell the hidden wonder story of the influence for which the hands were

but fluttering pennants of promise. (11)

さらにはその語りの途中でも"And yet that is but crudely stated.　It needs the poet there. (12)"と執拗に不特定の第三者"poet"の存在を強調する。ごく短い間隔で繰り返されるこれら「詩人」への言及は、いやでも読者の目を引く。多分に意図的なこれらの言及によって、語り手は自らストーリーテラーとしての不完全さを明言し、作品が内包する価値を幾分露骨に仄めかしている。語り手は作者が創出した作者の代理人であり、ストーリーには直接登場しない第三者として、omniscient な視点を与えられている。それゆえに、登場人物本人しか知り得ない過去や、細かな心情のひだまで自在に描いて見せることができる。いわばストーリーテラーとしては万能のはずである。それにもかかわらず、物語を他人に伝えるという行為におけるさらに上位の存在、すなわち「詩人」の存在を匂わせているのである。

ここで言う「詩人」とは、明らかに作者アンダーソンが志向する作家としての理想像である。事実、「ワインズバーグ」の献辞として彼は次の一文を掲げている。

> わが母、エマ・スミス・アンダーソンの思い出にこの書を捧ぐ
> 自分の身の回りの生活についての鋭い観察によって最初にわたしに様々な生涯の表面化まで見抜きたい渇望を目覚めさせてくれたこの母に。[2]

彼の作家としてのモチベーションの源泉はこの「生活の表面化に隠れたもの」を描き出すことにあった。アンダーソン自身が散文形式の著作において、この試みをしていることから考えて、「詩人」という語が指すものは、文字通りの詩作を生業とする人に限られないと考えるのが妥当であろう。作者の代理人である語り手は「詩人」たり得ないことを自ら示しているが、それは逆説的に、作家が果たすべき仕事の重要性の宣言となっている。つまりアンダーソンは意図的に不完全な語り手を介在させることによって、作品のテーマを

強調している。語ることの困難さを示すことによって読者の関心を喚起すると言う手法を採っているのである。

また「ワインズバーグ」中にも、いわゆる「グロテスク」でありながら、「詩人」の特性を付与されている人物が二人登場している。"Death"のDr.Reefyと"Respectability"のWash Williamsである。「死」のリーフィ医師は"He was almost a poet in his old age and his notion of what happened took a poetic turn." (123)とされている。また「品位」のウォッシュは、妻と妻の母親から受けた屈辱のために女性を激しく憎むようになり、その憎悪の仕方は"the abandon of a poet"(65)を伴っている。

リーフィー医師は、George Willardの母、Elizabethを診察中、やつれ果てた彼女の中に「愛らしい無邪気な少女」のようなものを見出している。つまり人の内面に隠れたものを理解し、共感するという、非常に「詩人」に近しい感性を持っているのである。また、ウォッシュの女性観は、きわめて偏ったものであるにもかかわらず、町の男性たちは彼に「本能的な敬意」を感じずにいられない。この、誰もが感じていながら無意識に、あるいは意識的に抑圧している感情を喝破する能力が「詩人的な奔放さ」と表現されている。これらの資質によって、彼らは「詩人」としての一面を持ちえたのである。以上の事例によって浮かび上がってくる「詩人」像は、他人に対する感応力と、表現者としての一面を併せ持った存在であると結論付けることができよう。

そうした「グロテスク」に対する理解と共感のまなざしは、先ほど触れた「主流」・「異端」の構図を副次的に提示してもいる。「グロテスク」の定義について、「ワインズバーグ」の序文「グロテスクなものについての書」から引用してみる。

> この世界がまだ若かった初めの頃にも、無数の思想はあったが、真理と言えるものは一つもなかった。人間が自分で真理を作り、それぞれの真理はたくさんの漠然とした思想の集成物だった。世界のいたるところに真理があり、しかもそれらの真理はみんな美しかっ

た。...

ところがその真理が人間をグロテスクなものにしたのだ。...人間が真理の一つを自分のものにし、それを自分の真理と呼び、その真理に従って自分の生涯を生きようとしはじめたとたんに、その人間はグロテスクな姿になり、彼の抱いた真理は虚偽に変わる（10-11）

ここでは、真理をつかんだとき、その真理のために人は「グロテスク」になると述べられている。ただしここで言う真理は決して珍奇なものではないことに着目する必要がある。彼らが執着している真理は、その正誤に関わらず、むしろ一般に誰もが抱きうる思想の一つである。つまりここで問題となるのは、個々人の資質ではない。一つの真理が相対的に「グロテスク」＝「異端」と評価されるということは、逆に言えば「異端」を規定する「主流」の真理が存在するということである。森の中にいては、その森の全景を視界に入れることができないのと同様に、社会の大多数が「主流」を形成している状況では、かえって「主流」は把握しにくいものであろう。異質なものを目にして初めて、人は我が身を省みる。「グロテスク」はそうした客観的な視点を与える存在としてあると考えられる。

そもそも彼らが「グロテスク」な姿に成り果ててしまうのは、人が潜在的に持つ、理性と本能の齟齬のためであると言える。理性とは社会的規範に沿った判断であり、本質的に本能的欲求を抑圧する。つまり「主流」の規範にそぐわない真理を抱いたとき、その人は「異端者」として絶え間ない心理的圧迫を受けることとなり、引用文中にある「真理に従った生涯」を全うすることが困難になるのである。だが彼らの「真理」の根底にあるのは、人生に対する主体的で真摯な姿勢である。よって、アンダーソンが見出した「美しい素質」とは、「グロテスク」たちが性質として備えたパーソナリティーを評価する言葉ではなく、主体的に人生を構築しようとする強固な「意志」への賛辞だと考えられるのである。

アンダーソンが、３６歳にして自らが経営する塗料販売会社の事務所から突然謎の言葉を残して失踪し、作家の道に入ったことは有名である。プラグ

マティズムという、アメリカにおいて普遍的な「主流」からの脱却を果たしたアンダーソンは、この選択について非常な自負心を持っていたことがうかがわれる。また、いくつかの作品においては、そうした自身の生き方を自己肯定したいという欲求が垣間見える。「ワインズバーグ」では自らを、作家としての理想像である第三者的な「詩人」の視点に置き、その半生を作品に再構築して昇華しようと試みたのだと言える。

II

前章で述べた「主流」・「異端」という構図で作品を眺めた場合、「詩人」アンダーソンは「グロテスク」たちにどのような形で救いを与えているのか。これを明らかにするために作品を概観したい。

「ワインズバーグ」は一見独立した２５の短編からなる短編集の形式を採っている。それぞれの短編は、架空の町「オハイオ州ワインズバーグ」に住む住人の生活の一部を描写するものであり、当時のアメリカ中西部のミニアチュアとも言うべき作品である。同様の連作形式を持つ作品として Edgar Lee Masters の Spoon River Anthology (1915)がある。一連のワインズバーグ・ストーリーの内、最初に書かれた短編「手」が Massez 誌上に発表されたのが１９１６年と、ふたつの作品の発表はほぼ同時期であり、共に中西部のごく一般的なスモールタウンを描いている点などに類似が見出される。ただ、同様のモチーフを描きながら、そこに込められた作者の意図の違いにより、両作品の雰囲気は実に対照的な風合いを持つ。

もっとも顕著な相違点は、言うまでも無く韻文と散文という形式の違いである。「スプーンリヴァー」は、死者が墓の中から生前の暮らしについての思いを吐露するという形を採っており、その形式上、当然死者本人の主観の羅列となっている。全体で２４０あまりの詩から成り、それこそありとあらゆる種類の人々が登場するため、さながら死者の町といった様相を呈する。詩はすべてタイトルとして人名を冠し、その人物が、自らの生前の思いを一人称で語る。その内容が後悔と怨嗟に満ちていることは「ワインズバーグ」に

おける「グロテスク」の場合と同様である。一方散文形式の「ワインズバーグ」は、今まさに苦悩の人生を送っている「グロテスク」の人々の生活に語り手が介在することによって、より客観的な視点を加えているという点で異なる。

ここに見られる両作品の相違点が示すものは、未来への視点の有無に他ならない。「スプーンリヴァー」の死者たちの語りには、生への執着が無いためにいかんともしがたい閉塞感が伴う。一方「ワインズバーグ」の「グロテスク」たちは、今まさになまなましい生への苦悩の只中で煩悶しているのである。「死ではなく生こそが偉大な冒険である」とはアンダーソンの墓碑に刻まれた文言であるが、事実「ワインズバーグ」はあくまでも生者たちの生き方に焦点を当てた作品であると言える。ただ、個々のストーリーでは結末に至っても劇的な救済が与えられることは無く、ただ粛々と元の抑圧された生活に戻っていくことが示唆されるのみである。だが同時に、アンダーソンが絶望して死を選択するグロテスクを描いてもいないことに注意を払う必要がある。生を放棄することは、生き方を――アンダーソンが「美しいもの」と表現した、人生に対する真摯な理想に基づいた生き方を――自ら否定し去ることである。アンダーソンは、そうした悲観的な結末の代わりに、一人の作家志望の若者を登場させ、彼らの生き方そのものに救いを与えた。それが、ジョージ・ウィラードである。

ジョージは全２５編の内、実に２０編に登場することからも、「ワインズバーグ」全編を通しての主人公と位置づけることができる。各短編における「グロテスク」たちとの交わりの中で成長し、最後の短編"Departure"において町を後にする彼の姿はBildungsromanの主人公にふさわしい。「グロテスク」たちは自らがグロテスクになった所以を聞き手ジョージに語り、彼を導こうとする。このような世代間継承という観点でグロテスク・ストーリーを俯瞰することにより、作家志望の青年ジョージが極めて重要な意味を帯びていることがあらためて浮き彫りとなる。ジョージの存在によって、単なる事例の羅列ではなく、それらすべてに通底する未来への希望が描かれているのである。

ジョージに与えられた「聞き手」という特性は新聞記者としてではなく、作家志望、すなわち「詩人」の感性を持つ者としての機能である。新聞記者としてのジョージは幾人かの「グロテスク」たちにとって、むしろ憎悪の対象になっている。これは、新聞記者が町の大勢を成す世論を形成するためである。そしてこの主流・異端と言う構図こそが「グロテスク」を生む基盤であることはすでに述べた。幾つか例を挙げてみよう。

ジョージの母エリザベスは、若い頃奔放で男勝りであった。けばけばしい格好をして男たちと遊びまわり、ときに男装をして自転車で大通りを乗り回すなど、明らかに周りから浮いた女性であった。当然町の人々は彼女を「異端者」と見なす。だが彼女のそうした振る舞いは、人生への燃えるような理想、彼女にとっての「真理」の発露であった。だがその理想を共有してくれるような男はついに現れず、戸惑っていた矢先、手近にいたトム・ウィラードと結婚してしまう。これが挫折の始まりである。同年代の娘たちはすでに町の青年たち——食料品店の店員や農家の青年たちと——結婚していた。彼女らがすれ違いざまに見せた幸福そうな笑顔がエリザベスを惑わせたのである。この女性たちは、年頃になったら町の男を一人選んで結婚するという、町の「主流」をなす慣習を体現している。その生き方自体は何ら間違ったものではないが、エリザベスにとってその選択をすることは明らかに妥協であり、「真理」の挫折そのものであった。理想のくすぶりを残した彼女には平凡な幸せは望むべくもなく、彼女は「グロテスク」な姿になってしまった。
"The Teacher"の Kate Swift もまた、一見奔放な生き方のために、「主流」から外れた人間と見なされている。一方"Adventure"の Alice Hindman は、これまた町の「主流」である「貞節」の考えに傾倒しすぎたために、精神に破綻をきたしている。また、これら結婚に関する問題は女性だけのものではなく、男性たちも、結婚をきっかけとしてある種の挫折を味わっていることが"Untold Lie"において語られている。女性を妊娠させ、結婚を迷っている Hal Winters に意見を求められた既婚者 Ray Pierson は、「自分の受けたいっさいの社会的訓練からも、自分の知っている全ての人間の信念からも是認できる、ただひとつの道」を、すなわちすぐにその女性と結婚することを勧め

ようとするが、とうとう口に出せずじまいになる。彼を迷わせたものは、自分の人生への疑問である。彼はかつて全く同様の状況で、その「ただひとつの道」を選択したのであるが、その結果である現在の生活には希望のかけらも無い。自分と同じ轍を踏ませてはならぬとハルの元へ走るレイは、自分の生涯を台無しにしたもの全てに対して抗議の言葉を吐きながら、結婚した当時描いていた理想の生活に思いをはせる。だがハルの元にたどり着いたとき、彼はすでに結婚を決意しており、レイは自嘲的に呟く。「これでいいんだ。おれが何と言ったにしろ、おれの言葉はうそになったにちがいないんだから。」(235)

これらの例は重要な示唆をもたらす。一つの事柄に対して必ず複数の「真理」が存在する。それらは「真理」である以上、両立させることのできないものである。「主流の真理」自体は一つの正しい思想である。だが、社会的に正しい「真理」と個人が抱く「真理」は相容れないものであるゆえに、そこには葛藤が生じざるを得ない。仮にエリザベスがトムと結婚せず、自分の「真理」を追究し続けたとしても、「主流の真理」の圧力は彼女を苦しめ、結局は「グロテスク」になる運命だったのではないか。レイ・ピアソンがどちらの「真理」を正しい選択として示したとしても、結局ハルは最初の迷いから抜け出すことができなかったのではないか。どちらの「真理」も「うそ」でしかありえないのではないだろうか。

これらは、社会を支配する主流の考え方、いわゆる健全な人間としてのあり方を規定する、固定された価値観が厳然と存在する以上、決して逃れられないものと言える。それは不特定多数の人々の総意であり、実体を持たない権威、言わば「無言の圧力」である。"Philosopher"の Dr.Percival が町の人々からのリンチにおびえるシーンは、その「無言の圧力」がもたらす恐怖感を象徴的に描いている。そしてその圧力が、他人から受けるよりもむしろ、個人の良識・倫理観に強い支配力を及ぼすものであることは各短編に顕著に現れている。ケイトにしろエリザベスにしろ、町の人々から「良くない噂」をたてられているが、それを気にかける様子はない。彼女たちに苦痛をもたらすのは、理想にしたがった生き方を貫徹できないことだからである。唯一そ

れらの影響を受けないのは"A Man of Idea"の Joe Welling ぐらいのものである。なぜなら彼は自らルールを作り、それのみに従うためだ。

これら社会の主流をなす考え方を外れ、自分の理想に執着する異端者たちには、常に「無言の圧力」に晒され続け、「手」のビドルボームのように暴力という形に至ることさえある。恐慌をきたしてビドルボームに詰め寄る生徒の父親たちの姿は、悪名高い「魔女狩り」をさえ想起させる。主流に属している間は気づかないが、そこから外れた途端、その圧力は襲ってくる。その圧力に屈し、妥協したために、彼らは自分の中に理想のくすぶりを残したまま、「グロテスク」な姿に成り果てたのである。その姿は、川魚を髣髴とさせる。激しい水流の中にあってかろうじて一点に留まっていられるのは、上流に頭を向け、流れの向きに沿って泳ぎ続けているためである。流れに逆らってあらぬ方向を向けば、水圧をもろに受けてたちまち流されてしまうだろう。

このような、進むこともできず、さりとて再び理想を追う若さを失った「グロテスク」の人々に再び理想を夢見る機会を与えるのが、素質ある若者ジョージなのである。作中において未来を象徴するこの若者には常に二つの勢力が働きかけている。一つは父親 Tom Willard を始めとするワインズバーグ社会の主流である。彼らは、ジョージにも彼らの価値観に従うことを期待する。特にトムに象徴される父親は、息子に実利的思考、抜け目の無さといった、いわゆる「男らしさ」というステレオタイプを吹き込む。そしてそういった「男らしさ」の対極に位置する性質を「女性的」として否定するのである。この「異端的」傾向のあったジョージに「目を覚ます」よう諭すトムの言葉がそれを示している。

一方でエリザベスしかり、ケイト・スウィフトしかり、「異端」の人々は一様に、まずジョージが犯そうとしている「間違い」を――トム・ウィラードが息子に期待したような生き方を――諌め、次いで正しい生き方を示そうとする。それは、言い換えれば慣習に易々として従う問題意識の希薄な、停滞した生活――大多数の町の人々が何の疑問も抱かず送っているような人生――に流されそうになるジョージを救い出し、自分たちの夢、すなわち社会の主流からの「脱却」の夢を託そうとする彼らの執念の図である。「脱却」とは

無論、やみくもに社会の「主流」から外れようとすることを指すものではない。むしろ一元的な価値観の中に埋没しつつある主体性を取り戻そうという原点回帰の意思である。ジョージに託された「脱却」は、社会における個人のあり方を問い直し、個々の生き方を追求する権利を主張する試みであるとも言える。

このように、世代交代という形で未来に希望を託している点こそが、死者の恨み言を綴った「スプーンリヴァー」との違いであり、「ワインズバーグ」が単なる症例の羅列に堕することを免れている所以である。アンダーソン自身、実業家という社会的に認められた地位を捨てているが、これが「脱却」のモデルとなっていると考えられる。この「脱却」のモチーフは *Many Marriages* (1923)を始めとするいくつかの作品の中で繰り返し用いられていることから、彼の作家としての中心命題であったと考えられる。

だが、「脱却」が、家族・生活・収入・人間関係といった、すでに安定した状況を一時的に破棄することを前提としている以上、そこには当然リスクが伴う。「つかずじまいになったうそ」において、ハル・ウィンターズの元へ走るレイ・ピアソンにしがみつく「子供らの手」(233) の錯覚は、彼を縛る理性の象徴である。若い頃の理想を見失った生活であるとはいえ、それを破壊することは責任ある大人には許されない行為であろう。そういった思想を作品という形で世に問うたときに、それが読者に、ひいては社会にもたらす影響について作者が負うべき責任をアンダーソンは認識していた。その上で、作家が果たすべき使命について、Miriam Philips に宛てた手紙の中で次のように述べている。

> I think this is true, that if you do at all good work, in any art, you begin to disturb people. Closeness to life always hurts. Well, you do not hurt but these darts fly out from under your pen wounding people. It takes, I presume, faith that in the long end it won't hurt and may perhaps even heal. [3]

ここに示されているのは、アンダーソンの作家としての使命感である。第一章冒頭の引用に戻るが、語り手は「詩人の仕事」の対象を"obscure men" 「目立たない人々」という表現を用いて一般化している。つまり社会の主流から外れた異端者の生き方を「美しいもの」として広く知らしめようと試みたのである。だが社会の主流に従って問題意識を持たず（あるいは問題意識を意図的に放棄して）生きる人々の眼前に、それを間接的にせよ否定する作品を提示することは、彼らの価値観を覆すことになりかねない。このことは「ワインズバーグ」中のいくつかの短編において暗に言及されている。例えば「手」において、生徒の父親たちが恐慌をきたしたのはビドルボームのホモセクシュアリティのためだけでなく、彼の説く夢想の世界が、父親たちが信じて疑わなかった価値観を覆す可能性があったためである。[4] だがその苦痛によって問題意識を喚起し、生き方についての主体的な理想を与えるきっかけとなったとすれば、結果として文学作品は人々に癒しを与えることになる。これが「詩人」アンダーソンのまなざしが見据えるものなのである。

Ⅲ

本章では、ジョージ・ウィリアムズ、「へんくつ」の主人公エルマー、"Drink"の Tom Foster といった若者たちの比較によって、「詩人」アンダーソンの最終命題である「脱却」のあるべき姿を検証していく。

前章で述べたとおり、ワインズバーグ社会は地域コミュニティー固有の社会通念が支配的であり、ある意味ですでに固定された共同体の姿としてある。それは連綿と積み重ねられてきた歴史の総体であり、外部とはある種の断絶状態にあるともいえる。トム・フォスターの祖母は、数十年ぶりに訪れた故郷を前に困惑し、立ち尽くしてしまうが、それは町の歴史から長く離れてしまったために感じる、自分がよそ者になってしまったという疎外感のためである。逆に、町にずっと住み続けた人間は、その町の問題点に気づかず、結果として、社会は停滞した状況にあると言えよう。

そういった状況の中、若者たちはワインズバーグを離れ、「どこか都会で」

職を探そうとする。彼らにとって都会は田舎町の因縁から逃れた自由の象徴であり、また親の庇護を離れ社会に参加していくという、成長段階の重要な局面の舞台として認識されている。しかしながら、新たな社会的規範を押し付けられ、結局は形が変わっただけの抑圧状態の連鎖に陥るという危険を常にはらんでもいる。「へんくつ」のエルマーがまさにその例である。

彼はワインズバーグの町の人々から「へんくつ」として軽視されているという半ば強迫観念じみた考えに取り付かれている。彼が唯一話しかけることができるのは、白痴の老人 Mook だけであり、それも会話と呼べるものではない。老人はエルマーの発話を聞き流すだけであり、同意も反論もしないためである。つまりエルマーのここでの弁舌は社会に対する抗議のリハーサルである。彼がこの老人を相手に選んだのは、「町外れ」に住む「白痴」の老人を町の主流に属しない「異端者」仲間と見なしたためであろう。だがエルマーが去った後、老人は彼を気狂い呼ばわりし、彼の抗議が徒労に終わることを暗示している。

エルマーの鬱屈した感情は、ジョージ・ウィラードへの憎悪へと変質する。なぜならジョージは、新聞記者という職業柄、町のコミュニケーションの象徴的存在とみなされるためである。だが物語の最後、汽車に乗る前にジョージを呼び出したエルマーは結局何も言えず、ジョージを散々殴りつけた後汽車に飛び乗り、ワインズバーグを後にする。彼はその行為によって自分が変わり者でないことを証明できたと満足そうであるが、実際のところ、ジョージはただ呆然とするだけであった。

エルマーが行動を起こす前に抱いた考えは、町の主流を成す「無言の圧力」に対して個人が抱きうる「反発感情」の一つのタイプを示す。

> 「あいつ（ジョージ）をやっつけてやれば、もっと大きな敵を――にやにやしながら自分勝手な考え方をしているものを――つまりワインズバーグ町の判断なるものを――やっつけることになるかもしれないではないか」(217)

つまりエルマーが、コミュニケーションの象徴であるジョージに対して行う暴力は、町の「ルール」に対する拒否の主張なのである。いわば異端者が、町の「無言の圧力」に対して去り際に起こした反逆である。しかしながら、呆然としたジョージの心境が示すとおり、反逆に至ったエルマーの意図は少しも理解されない。異端者エルマーの挑戦は蟷螂の斧に過ぎなかったのである。

さらに、都会へ出る彼の未来にもまた同様の状況が待っていると推測される。彼は都会への期待を次のように述べている。

> 列車にただ乗りをして、クリーヴランドについたら、そこの大勢の人たちの中にまぎれこもう。どこかの工場に仕事口を見つけて、ほかの労働者たちと友達になろう。しだいに他の人たちと同じようになり、めだたないようになろう。そうすれば自分も喋ったり笑ったりできるようになる。もうへんくつではなくなり友だちも作れよう。ほかの者たちと同じように自分にとっても人生が暖かみと意義を帯びてくるに違いない。(223)

エルマーは、他の労働者にたち混じって働くうちに次第に「目立たなく」(indistinguishable)なり、溶け込んでいけるだろうと考えている。だがもともとエルマー は、自分で考えているような「目立った」人間ではない。彼の過剰な自意識は、暗黙のうちに画一化を強要してくるワインズバーグ社会の「無言の圧力」を彼なりに解釈した結果生まれたものであろう。彼の口癖「洗濯され、アイロンをかけられ、のりをつけられる」"I'll be washed and ironed and starched."(107)は画一的・平均的に加工される人間のイメージである。だが、その状況を抜け出した先に彼を待つものは、皮肉にも文字通り画一的な都市労働者としての生活である。もちろん都市労働者＝無個性と即座に断定することはできない。だがエルマーは町から逃れた後の生活に関して明確なイメージを持っておらず、逃げるという行為そのものが目的化している状況にあっては、彼のその後の生活についても、結局は町にいたときと同様の

抑圧されたものとなることが予感される。「洗濯され...」という言葉が暗示する、工場で大量にクリーニングされる服を思わせるイメージは、画一的な社会への適応を強要される人間の苦痛の叫びである。そしてそれは、ワインズバーグであろうと都会であろうと、社会の中で生活するうえでは決して逃れることのできないものなのである。とすれば、エルマーの脱出劇は、結局何ら根本的な解決をもたらしていない。

一方トム・フォスターは、エルマーとは逆に、表面上は町に「属して」いながら、いかなる軋轢も生じない人物である。彼は生来無口な男であり、一度も自己を主張したことがない。それでいて孤独というわけではなく、町の人々に溶け込みながらも、同時に周りからはっきり孤立していられるという類まれな才能を持つ。言うなれば傍観者である。しかし、生まれて初めて酒に酔った彼は、ジョージに対して次のような発言をしている。

> 「おれは苦しみたかったんだよ。誰もが苦しい目にあい、過ちを犯しているんだから。おれは自分にできそうなことをいろいろ思い浮かべてはみたが、みんなだめなんだ。みんな誰か他の人間を傷つけることになる。」(247)

この発言に現れているのは、無条件に社会と同化している自分への強烈な問題意識である。「苦しみたい」という言葉は、自己を主張したいという本心の表出である。ある個人の自己主張は、それが他人に伝わった時点で必ず、多かれ少なかれ軋轢を生む。トムの場合は、内容の真偽はさておき、Hélen への恋心を口にしたために、同じくヘレンに思いを寄せるジョージとの間に諍いが起こった。彼が本能的に恐れているのは、このように自分の意思を主張することによって調和が乱れることである。この苦悩の姿は、「脱却」を試みるすべての人間に起こりうるものであろう。実業家としての安定した生活を捨てて作家への道を踏み出したアンダーソンもまた、同様の葛藤にさいなまれたはずである。安定した社会において、その安定を揺るがす類の行為は、そこに安住している人々にとってなんらかの「痛み」を与えるものである。

ゆえに、その行為を行おうとする者は不断の決意と、あらゆる障害を乗り切るパワーを必要とする。先に挙げたフィリップスへの手紙の中でアンダーソン自身が同様の自覚を示唆していた。「詩人」アンダーソンとトムの決定的な違いは、アンダーソンが決然と作家への道を踏み出したのに対し、トムは結局、独り酒に酔うことで、「脱却」への欲求を自分の中だけで処理してしまったことであると言える。

以上に挙げた二人の若者は、他のグロテスクたちと同様、挫折の運命を予感させる結末に終わっている。ただ一人可能性を残すのはジョージである。ジョージが他の二人と異なる点は、ワインズバーグの町にいながらにして、町の「主流」との決別を果たしたことである。その変化は「ある自覚」、"The Teacher"、"Sophistication"の間で起こる。そこに至るまでのジョージは、社会からもたらされる様々な影響の下で模索している、成長段階の不安定な状態にある。その状態を母エリザベスは「あの子は手探りしているのだ、自分を見出そうと努めているのだ。… あの子のうちには成長しようともがいている何かが潜んでいるのだ。」(33)と表現し、彼の中にある素質の萌芽を見とめている。

「ある自覚」において、その素質の萌芽が象徴的に描かれる。玉突き場で若い仲間相手に愚にもつかない笑い話に興じた後、彼は一人暗い町を歩き出す。「ワインズバーグ」において闇は隠れた「美しいもの」が表出する舞台装置として用いられている。[5] グロテスクの人々が束の間、抑圧状態から解放されて語りだすのは常に暗闇の中である。その闇の中でジョージは一人ごつ。

> 「僕は僕なりのささやかなやり方にしろ、何かを学び、人生に従い、法則に従って、与え、進み、働くようにしなきゃいけないのだ。... 一人でいるほうがいいんだな。ぼくがアート・ウィルソンのような話し方をすれば、みんなは理解してくれるだろうが、あの連中には、今ぼくがここで考えていたようなことは理解できないに違いないのだ。」(204)

ここで言う「法則に従う」とは、慣習に従うという意味ではあるまい。これは主体的に人生と関わろうとする青年の宣言である。そして、町に同化していくであろう仲間たちとの決別を思い立つ。つまりここでジョージは、仲間たちとの子供じみた騒ぎに象徴される「少年時代」との決別、そして母エリザベスが言うところの「おしゃべりで抜け目が無いだけのばか者」達から――つまりは人生についての深い洞察を持ち得ないであろう人々から――離脱することを初めて意識したのである。ただしこの行為には、類似の、そしてきわめて危険な前例がある。"Loneliness"の Enoch Robinson は、芸術について喋り散らす仲間たちに嫌気がさして、後に一人の部屋に閉じこもり、頭の中で作り出した人々を自分の考えに従わせることで、カタルシスを得た。ジョージが仲間の元を去り、Belle Carpenter を相手に自分の素晴らしさを喋り散らす様はイーノクの状態と酷似する。頭に思い浮かんできた言葉を、それが「意味に満ちた素晴らしい言葉というだけで」口に出し、一種の興奮状態に身を任せるというこのときのジョージの行為を沼田は、ケイト・スウィフトが諌める「言葉を弄んでいるだけ」であり、「言葉を安く売るだけ」の行為であると指摘する。[6] この指摘どおり、ジョージは危険な兆候にあった。若さゆえの不安定さが昂ぶった感情を歪曲させ、ジョージが踏み出した「脱却」への一歩を誤った方向に落とし込んだのである。だがその状態も、嫉妬に狂った Ed Handby の不条理な暴力によって打ちのめされてしまう。エドは際限なく膨らむ若者の過剰な自信を打ち砕き、結果として救ったことになる。大人の男性が見せつけたそのあまりにも不条理で、抗い難い強大な力は、世に出る若者に対する洗礼と言える。手も足も出ず、ただ打ちのめされたジョージからは、先ほどまで感じていた力が去り、憔悴して再び町へ戻っていくのであった。この情景は若者に恭順を強いる社会を象徴しているとも言える。

ジョージにとって転機となるのは母エリザベスの死である。母の遺体を前に「いとしいひと、いとしいひと、愛らしい、いとしいひと」(262)と呟く彼は、再び「自分の外部からくる何かの衝動」に駆られているが、この状態は、「ある自覚」において彼を襲った恍惚状態とは明確に区別されるべきもので

あろう。なぜならこれより後、彼は言葉を「弄ぶ」ような発言と完全に決別するためである。「死」に続く短編「世間知」における「もうおしゃべりをやめたほうがよさそうだ」(268)、そして、聞こえてきた誰かの自慢話に対する「なぜああも威張り散らしたがるんだ。黙ってりゃいいじゃないか。」(270)という二つの発言がそれを示す。エリザベスという「グロテスク」な姿に成り果てた女性の死がきっかけとなって、その息子が「脱却」への希望を受け継ぐという世代交代が成されたのである。

こうしてジョージは町を後にすることになるのだが、出発間際の彼に対してGertrude Wilmotという女性が「つっかかるような調子」で、「幸運を祈るわ」(279)という一言を残す。この言葉は彼を見送る人々の誰もが感じていたことを的確に表したものだとされている。それはただ一人「脱却」への一歩を踏み出そうとする若者に対して、その挑戦の失敗を暗示する皮肉だろうか。あるいは言葉どおり、ただ一人可能性を持って町を出て行く彼に希望を託す羨望に近い想いであるかもしれない。

Ⅳ

作品の中心をなしているのは、新聞記者ジョージ・ウィラードがワインズバーグを巣立つまでのごく短い期間であるが、ワインズバーグの町そのものに関する記述でもっとも古いものは、「酒」に登場するトムの祖母の回想の中に見られる。老婆が住んでいた当時のワインズバーグは、「１２,３件の家がトラニアン・公道沿いのよろず屋の周りにかたまっているだけ」(236)の集落であり、彼女が孫のトムに「ワインズバーグでなら畑で働いたり、森で獣を射ったりして生活を楽しめる」(237)と語っているところから、明らかに機械化・産業化が到来する以前のワインズバーグであることが推測できる。ジョージを中心とする一連の物語の背景はそれから５０年後である。さらに"The Thinker"において、ジョージの父トムが、第２５代大統領William McKinleyについて言及していることから、その在任中、すなわち1897-1901の周辺が物語の舞台であると推定できる。

アンダーソンが作家業への一歩を踏み出した当時、広告産業の発展は、文学界にも波及し、雑誌購読者＝消費者をひきつけるための通俗的な作品の跳梁の原因となっていた。[7] O'Henry などのいわゆる筋立てを重視した短編が氾濫したが、それらは大衆に迎合するものに他ならず、一方で文学的価値を擁しながらも、部数拡大を目指す雑誌社の意向にそぐわない作品は、その発表の場をまだ発行部数の少ない Little Magazine に見出すほかなかった。広告収入を見込んで大量の読者獲得を目指した大衆雑誌とは趣を異にした Little Magazine は、純粋に詩・文学の興隆を目指すもう一つの潮流を形成していった。アンダーソンら新鋭の作家の多くはその潮流の中で、自らの芸術家としての立場を確立していったのである。

産業化に伴う大量生産・大量消費のイメージは、「ワインズバーグ」中でも、樽詰めされて都市に出荷される「丸々とした完全なリンゴ」や、「都市の工場労働者」などの表現に見られ、都市部と田舎町の二項対立の構図を成している。この当時、産業化の広がりと共に、工業品の消費を喚起する役割を担ったのが大衆雑誌の広告である。鈴木は１９８３年創刊の女性雑誌 *Ladies' Home Journal* について次のように述べている。

> こうした広告主よりも読者の立場に立った編集方針は、Bok が積極的に読者からの投書や相談を取り上げたことと相まって、*Journal* に対する読者の信頼と親近感を揺るぎないものにした。そして、それは、読者一人一人が「自分の雑誌」という感覚の下に、同誌のアドヴァイスを素直に受け入れていく素地を作るのに役立った。つまり、*Journal* が提供する「サーヴィス」のメッセージは、読者の女性たちの思考を巧みにコントロールし、特定のライフ・スタイルの普及のための武器ともなりえたのである。[8]

この時期に不特定多数の消費者に対して発信され続ける「一般的」中産階級のイメージが、それまでの各地域固有の生活信条に取って代わったと言えるのではなかろうか。また、同論文において鈴木は、大衆雑誌が陸の孤島とで

も言うべき個々の地域コミュニティーを超えて、アメリカ全体を網羅した「アドヴァイザー」としての地位を確立していたことを指摘する。[9] 言うなれば、人々は新たに、企業によって作り出された「一般的生活」という信仰対象を与えられたのである。このような風潮の広まりは人々の階級意識をより強固なものとし、同時に、そのイメージに沿わない人々を社会から脱落した「異端」と見なす意識の素地を形成したのではないだろうか。つまりワインズバーグを舞台に描かれる「主流」・「異端」の構図は、大衆雑誌という媒体によって、全アメリカ規模で表出していたのである。

こうして社会に新たな主流がもたらされつつある中で、実業界・広告業界に長く身を置いていたゆえの危機感をアンダーソンは作品に結実させた。いわゆる中産階級に限れば、産業化がもたらす大量生産・大量消費への潮流は、社会を潤し、多くの人々に「平均的な」生活をもたらしただろう。だが同時に、合理化の名の下、労働力として「個人」の固有価値は一律化され、アンダーソンが愛した、手作業に従事するような職人気質は廃れてしまった。主体的な生産活動から離れ、労働という行為自体を商品としか見なさなくなることは、尊厳を失うことにつながる。加えて、本稿で論じたワインズバーグの状況から還元すれば、ある程度安定した生活であるがゆえに、それが枷となり、いかに生きるかという人間の本能的命題が二の次にされるという状況に陥ったであろうことも推測できる。こうした社会の主流と個人の構図を、架空の町の中に投影した「ワインズバーグ、オハイオ」は、一つの国家として肥大していくアメリカにおける個人の意味をあらためて問いかけている。

結

以上述べてきたように、個人の生き方は、それが国家のような巨大なものであれ、ひとつの町であれ、社会の主流をなす思想に絶えず翻弄され、相対的に判断される。このきわめて不安定で寄る辺ない状況に、「詩人」アンダーソンは理解と共感を寄せ、未来を担う若者・ジョージを投入することで、希望を見出した。ジョージの結末は描かれていないが、その初々しい姿には困難

を乗り越えてついには「脱却」を果たすことが期待される。そしてそれは、アンダーソン自身にとって必要な結末ではなかろうか。

註

1. Sherwood Anderson, Winesburg, Ohio Authoritative Text Backgrounds and Contexts Criticism, eds, Charles E. Modlin and Ray Lewis White(New York, W.W. Norton & Company) 5.以後、本書からの引用は、本文中の括弧内にページ数のみ示す。
2. Sherwood Anderson, 『ワインズバーグ・オハイオ』 橋本福夫訳（東京：新潮社、1959）6。本稿における短編の題および訳文はすべて本書による。また、以後本書からの引用は括弧内にページ数のみ示す。
3. Sherwood Anderson Selected Letters, ed, Charles E. Modlin(Knoxville:The University of Tennessee Press, 1984) 193.
4. 小原広忠、「『ワインズバーグ・オハイオ』の「手」再考 ――主人公の本名・異名の根を探る」『文学とアメリカ』2（大橋健三郎教授還暦記念論文集刊行委員会編、1980）188。
5. Walter B. Rideout, The Simplicity of *Winesburg,Ohio*, "*Winesburg, Ohio* Authoritative Text Backgrounds and Contexts Criticism"172
6. 沼田知加、「女優志願（3）シャーウッド・アンダソン『ワインズバーグ、オハイオ』－女優になりたかったのに－」『共立女子大学文芸学部紀要』49, 2003, 70
7. 鈴木透「リトル・マガジンとアメリカ短編小説（Ⅱ）百万人の物語 ―大衆雑誌の仕掛け人たちとジェンダー、階級、人種 ―」『教養論叢』90（慶應義塾大学法学部法学研究会、1992）45-73。
8. 鈴木、56。
9. 鈴木、56